

巻頭によせて

院長 的場直矢

本誌の前身は、昭和34年の発刊で、医学中央雑誌にも登録されていたが、昭和39年第6号をもって惜しくも中断してしまった。昭和55年は当院開設50周年に当り、また一番町の旧病院から現在地に新築移転したのを契機に、院内で雑誌復活の機運が起こり、渡辺至君(現東北通信病院外科)をはじめとする4名の編集委員が選ばれて再び陽の目を見ることになった。

論文は医局のほか医療技術部門、看護部門を含め、また年間の剖検記録や臨床統計も掲載することにした。以前のいきさつもあったが、昭和55年1月発行のものをVol. 1, No. 1として、当分の間は年1回発行することにした。

日常多忙な診療の中で書き上げた論文である以上、できれば少しでも多くの人々の目に触れる学会誌や商業的医学雑誌にのせたいという考えもあろうが、今回の第9巻まで「Klein aber mein」の精神の熱心な投稿者に支えられてきたことを嬉しく思う。

先年学生のサークルの卒業コンパで、Oslerの「書物を見ないで病院に関する諸現象を学ぶことは、海図のない海を航海して行くようなものだ。しかし患者も見ないで書物だけ勉強することは、まったく海にも行かないということだ」という言葉をひいて、「卒業したら患者をみて、書物もよく読んでほしい」とスピーチした。すぐに基礎系の先生から反論があって、マサチューセッツ海洋研究所の碑には「See nature, not book」と書いてあり、「本などやたらに読むな」とのお叱りがあった。

間違えば死ぬかも知れない患者を持つ臨床医との立場の違いを感じたが、元を正せば一致するところもあろう。診療においても、生の現象をしっかりと観察することは基本的なことではあるが、直感や独断だけでは駄目で、これまでの知識の集積を判断の材料にしなければならない。

臨床医学はたしかに経験がものをいう点もあるが、必ずしも経験が長いからといって適切な診療ができるとは限らない。経験したところを分析し整理する作業があって、はじめて経験が有力な武器となって自分の中に定着して行く。日常の多忙な仕事の中で、時間をさいてあえて論文を書いて行くこともこのような作業の一つであろう。

多くの病院が医学雑誌を出しているが、その内容は病院の医学的レベルをよく反映しているように思われる。いかに機器が整備され、症例が豊富であっても、診療に従事するものの理念や努力に欠けるところがあれば、医療の水準を上げることはできまい。この意味でも本誌が当院のレベルアップへの一助となれば幸である。